

高峰登山のタクティクス考察

尾形好雄

はじめに

今年（1996年）は、日本隊によるマナスル初登頂から40周年にあたる。この40年の間にヒマラヤ登山は大きく変遷した。

戦後の日本人によるヒマラヤの高峰登山は、1952年（昭和27年）のマナスル偵察から始まる。その後、経済力の発展に伴い日本人のヒマラヤ登山も年を追うごとに急増した。因みにこの44年間で標高6,000m以上の山に入山した日本人のヒマラヤ登山隊数は約1,300隊を超え、入山者数は延べにして約1万人近くにも及ぶ。この間、マナスルの8,000m峰初登頂を皮切りに、8,000m峰14座全てに足跡を印し、その8,000m峰のサミッターも実数で200名を超えた。

こうした流れの中で、ヒマラヤ登山の楽しみ方・形態なども多彩となってきた。一時期叫ばれたヒマラヤ登山の三極構造（①巨峰のヴァリエーション・ルートや冬期登山指向②少人数によるアルパイン・スタイル指向③既登・未登・高さ・困難にこだわらず、ヒマラヤでの登山を楽しむ指向）は、ヒマラヤ登山を指向する登山者の高齢化に伴い崩れ、最近ではノーマルな8,000m峰のピーク・ハンティングや手頃なピークでヒマラヤ登山を楽しむような傾向が多く見られるようになった。

国内登山が中高年登山者によって席捲され、深田久弥氏の日本百名山がオーバーユーズの危機に晒されているが、ヒマラヤの高峰登山でも元気な中高年登山者が大いに活躍され、百名山ならぬ8,000m峰コレクションが行われるような時代となった。このようなヒマラヤ登山は既に欧米の熟年登山者によってなされていたのだが、ここにきて漸く日本の中高年登山者も欧米人のようなヒマラヤ登山を実践できるようになったと言えよう。こうしたニーズの中でヒマラヤの高峰登山にも数多くのコマーシャル・エクスペディション（商業主義登山）が企画されるようになった。これは端的に言えば、パッケージ・ツアーの延長でヒマラヤの8,000m峰にチャレンジできるのである。一定額の費用を支払えば、一切の煩わしい準備に悩まされることなく、登る事だけに専念して8,000m峰などの高峰に挑めるのであるからこれほど便利なものはない。サービスをお金で買うやり方である。

一方、自分たちは中高年だから、自分たちは8,000m峰への初見参者だから、と言って酸素を使おうが、高所ポーターを潤沢に使おうが、なりふり構わず何が何でも8,000m峰に立ちたい、という登山隊（者）も多く見られる。

コマーシャル・エクスペディションのような公募登山隊の場合は、大抵しっかりしたノウハウに基づいて運営されているようであるが、後者の何が何でも8,000m峰に立ちたいという登山隊（者）の中には、タクティクス面で失敗されてる隊も見受けられる。失敗されてる隊の多くは50年代、60年代

4. 論文

の高所登山タクティクスに固執してチャンスを逃しているように思える。

基礎体力の劣る中高年登山者や休暇の少ないサラリーマン登山者が、何が何でも登りたい場合の行動パターンをどうすべきか、ここでは筆者のチョー・オユー（8,201m）登山を振り返ってタクティクスについて考察してみたい。

チョー・オユー登山のタクティクス

1993年秋、冬のサガルマータ（エヴェレスト）南西壁登山のプレ登山としてチョー・オユーに向かった。

このプレ登山計画については本番直前の秋に8,000m峰に登っては高所順応どころか高所疲労が残って本番ではかえってマイナスになるのでは、と危惧する声も聞かれた。そのためこのプレ登山では、高所疲労を残さず高所順応のうまいところだけを残すためにはどのようなタクティクスがベストなのか以下のような点を考えた。

① ルートはどうするか。

高所順応が目的なので良く知られた西北西稜のノーマル・ルートとする。

② 酸素を使うか使わないか。

プレ登山に涎を垂らして登るような限界的な登山では、かえって逆効果になるので酸素を使って身体ダメージの少ない登山をする。

③ 登山期間はどのくらいにするか。

高所順応がきちんとできる範囲で、極力短期間とし、高所疲労を少なくする。

④ 高所ポータをどうするか。

体力消耗を少なくするため、荷上げは高所ポーターに委ねる。

⑤ 登山終了後の休養はどうするか。

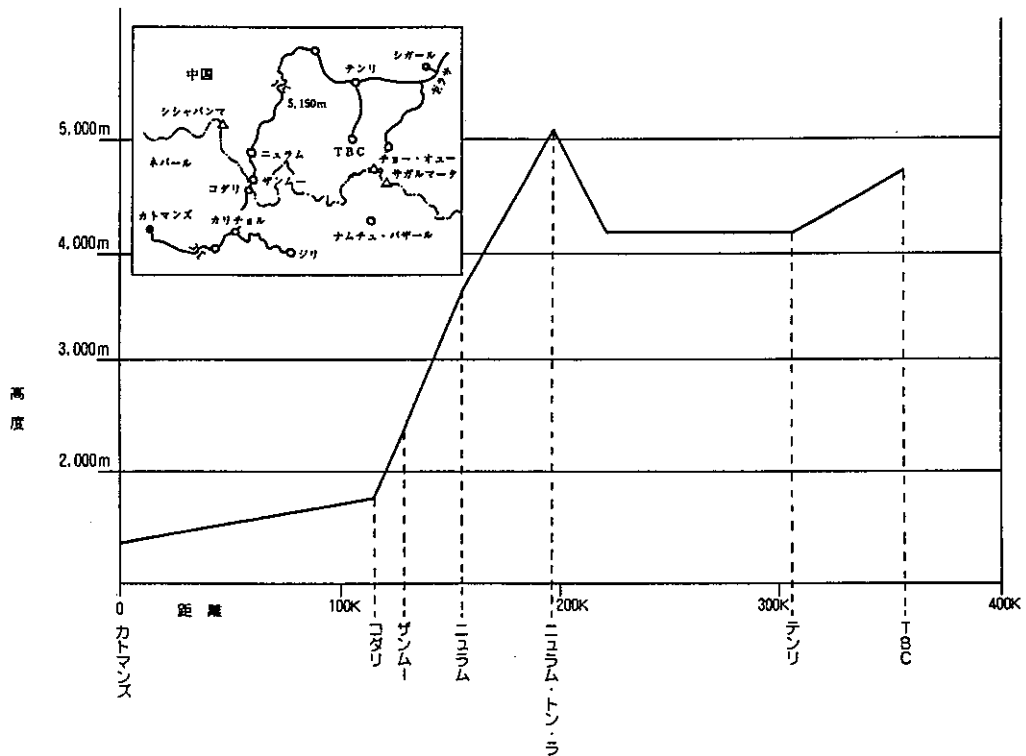
一番重要な点である登山後の休養はカトマンズやタライを中心に、本番の準備を含めて約3週間取ることにした。

ようするにこのチョー・オユー登山では、コマーシャル・エクスペディションのようにノーマル・ルートを酸素を吸って、高所ポーターを使って、楽して8,000m峰を登るタクティクスを考えたのである。

チョー・オユーへの入山は3隊に分かれてカトマンズ（1,340m）からコダリ経由で中国・チベットに入国した。チベットの国境の街ザンムーからは、中ネ友好道路をひた走ってティンリに至り、そこから荒涼とした広野を進んでジャブラ河の大本営（車の終点、4,750m）に入った。

カトマンズからこの大本営までは約360km、高度差にして約3,400m。これを車で2日ないし3日で一気に入るのであるから身体的ダメージはかなりのものである。

我々はこのアプローチ・マーチで少々失敗した。2日で大本営に入ったのでは高度的に辛いので、



輸送担当者2名以外はニューラム(3,600m)で1~3日滞在し、その後大本営に移動するようにした。これは多分に中国登山の費用徴収規定の関わりが大きい。なるべく大本営までの都市滞在を少なくして経済的に上げようとしたため、無理を強いることになった。お陰で筆者は大本営に入っただけで裏山での高所順応訓練に励みすぎて軽い肺水腫にかかってしまった。直ぐ当番車(登山期間中、緊急用に車両を大本営に待機させた)でニューラムへ下りて休養したため大事には至らなかったが、カトマンズから入る場合、この初期高所順応に十分配慮する必要がある。尤もこれはカトマンズからのアプローチに関わらず、この高度(3,500m~4,500m)が高所順応の最初の関門と云える。車などでアプローチする場合は一層の注意が必要である。

9月14日~29日にかけて3隊が順次この高度4,750mの大本営に入った。大本営に入ってから我々は本格的な高所順応訓練に入った。チョー・オユーのベース・キャンプ(以下BCとする)の高度は5,650mである。BC入りまでにこの高度の順応が図れば良いのだが、あいにく大本営の裏手の山では5,400mまでの高度しか得られなかった。この裏山で3日~5日かけて高所順応訓練を行った。この時の注意点としては、初日から無理をせず、徐々に高度を高めることである。パルスオキシメーターなどで順応の状態をチェックすると良い。若い隊員の場合は張り切りすぎるので注意を要す。

この高所順応にたっぷり時間をかける事である。順応しない身体でBCに移動してもまた下りて

4. 論文

くる羽目になりかねない。焦らずに血液中の赤血球の増加を待つのである。この高度での順応が出来上がった者（パルスオキシメーターの値で82%以上を目安とした）から順次BCへと向かった。

隊員が大本営で高所順応訓練をしている間に我々の隊荷はヤクによってBCに運ばれ、BCは9月17日にシェルパ達の手によって設営された。因みにシェルパはサードー（シェルパ頭）の他、高所ポーター6名、キッチン・スタッフ3名を同行した。

BCまでの高度差は900mなので、大事を取って途中で仮キャンプ（5,100m）を設けて2日かけて入ることにした。

結局、カトマンズからBC入りまでの所要日数は、9日～12日かけた。但し、この夏にパキスタンのブロード・ピーク（8,047m）に登頂している田辺隊員と江塚隊員は、この順応訓練なしで直接BCに入った。カトマンズからわずか3日で一気に高度差4,310mも稼いでBCに入れるのであるから、プレ登山の効果は抜群といえた。

2次隊、3次隊が順次BCに集結している間、高所ポーターによって上部キャンプへの荷上げが行われ、9月25日にC1（6,400m）、27日にC2（7,000m）が建設された。

この登山では、BC以上に上部キャンプを3つ設けてアタックするタクティクスで、C3（7,600m）では睡眠用酸素も使用することにした。C3から上部は行動用酸素も使う計画なので、今回一番辛いのはC3直下の行動である。そこで、行動パターンとしてはC2（7,000m）を一度往復し、C3はアタック前日に設営すれば良いと考えた。しかし、若い隊員たちは最終キャンプの高度まで一度経験していないと心配だ、ということでC3まで往復することになった。しかし、これは不要な行動であった。

筆者を含めて40歳代後半が3名いたが、この中年と女性1名、それに8,000m峰初見参の寺田隊員はC2までの往復だけで支障なく登れた。

この中年組は、BC入りした後、一度C1を往復してからC1に上がって宿泊し、C1からC2の往復をするだけで、後はBCに下ってアタックに備えた。

夏にブロード・ピークを登ってきた田辺、江塚両隊員は、カトマンズから3日でBC入りした後、1日休養しただけで翌日にはC1に上がり、次の日C2を往復してBCに下ってアタックに備えた。

このように2次隊と3次隊は、アタック前に7,000mまでの往復だけでアタックに臨んだのである。図-1から図-3は隊員の行動表である。参照されたい。

確かにこれまでの多くは必ず最終キャンプまでの高度経験を一度踏んだ後、BCへ一旦下って休養を取り、そしてアタックをかけるというものであった。しかし、これでは余計な身体ダメージを与えるだけである。経験の無さが無駄な行動を強いてきたと言える。

この行動パターンによるアタックは、まず1次隊として10月8日に尾形、名塚、佐藤、後藤、星野、秋山が登頂。C3からの所要時間は2時間40分で9時56分に登頂。

続いて2次隊として11日に田辺、江塚と高所ポーター2名が登頂。C3からの所要時間は1時間50分で9時50分に登頂。

3次隊は12日に八木原、宮崎、吉田、寺田と高所ポーター4名が登頂。C3からの所要時間は2時間50分で10時30分に登頂。

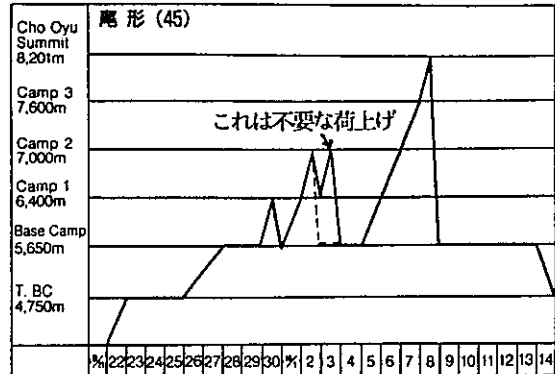
こうして全隊員12名と高所ポーター6名の18名が登頂し、いずれの隊も登頂後は一気にBCまで下降した。

因みにBC入りから登頂までの日数は1次隊の佐藤、星野が17日。名塚、後藤、秋山は16日。遅れてBC入りして1次隊と一緒に登頂した尾形は11日。2次隊の田辺と江塚は10日。3次隊の寺田は17日。八木原、宮崎、吉田は15日、では当初の計画通りに運んだ。勿論、これは酸素を使っでの登山である。

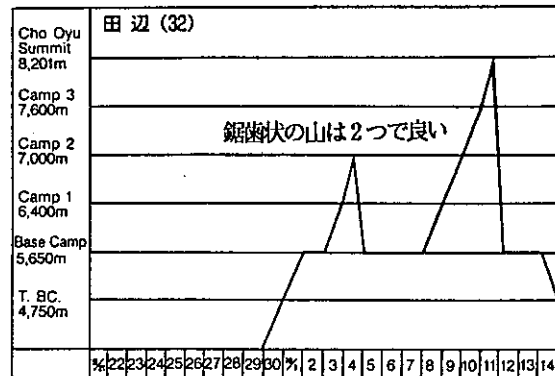
中高年の方が、ルート工作も荷上げも無く、楽しんで(酸素を使っで)登るだけを考えるならこのような行動パターンがベターのように思われる。

また、無酸素で登ろうとする場合は、チャー・オニュー登山の殆どの隊が実践しているように最終キャンプの位置をC2(7,000m)にするのがベターであろう。この登山でも、高所ポーターのロブサン・サンブー、ニマ・ドルジェ、ミンマ・ノルブの3名がC2からアタックし、C3からアタックした隊員と余り変わらない時刻に登頂している。しかも彼らはC3を撤収して

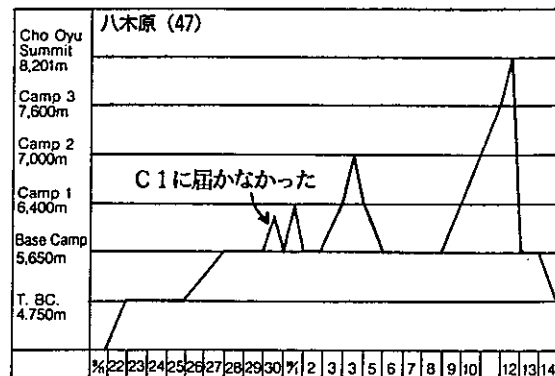
その日のうちにBCまで下ってきているのである。高所でのシェルパの強靱さには驚嘆させられるが、C3(7,600m)で1泊するのとC2(7,000m)で1泊するのとでは身体ダメージがかなり違う。C2~C3間の登高が2~3時間とするなら、低いキャンプでぐっすり眠って、その分早くに出発すれば良いのである。エヴェレスト登山がサウス・コル(7,980m)から8,000m台の高度を約850m獲得し



肺水腫から立ち直った副隊長の行動表 (図-1)
(第1次アタック)



ブロード・ピークから連続登頂した隊員の行動表
(第2次アタック)



最年長隊長の行動表 (第3次アタック)

4. 論文

てアタックされていることを考えれば、チョー・オユー登山で7,000mの最終キャンプから約1,200mの獲得高度は十分可能である。ただ、この登高スピードを得るには、登山者側の体力もさることながら、積雪の状態によっても大きく作用される。ポスト・モンスー期の早い時期では、深いラッセルに苦勞させられて思うように進めない場合もある。いつ登るか、と云う登山時期の選定が一つのキー・ポイントである。

おわりに

これまでのオーソドックスな包囲法登山では、前進キャンプを幾つ展開するか、そのキャンプに必要な物資はどれだけ荷上げしなければならないか、そのためには隊員のローテーションをどうするか、と云う発想の行動パターンであった。

しかし、効率良く登るための行動パターンをまず考えると、上部キャンプでの不要な滞在を少なくでき、場合によってはキャンプを一つぐらい減らすこともできる。それは荷上げ量が軽減できることでもある。

大枚払って参加するコマースナル・エクスペディションなどでは、荷上げは全て高所ポーターがやってくれるのだから、荷上げの行動パターンに縛られる必要がない。登ることだけを考えれば良いのである。目標の山に登りたければ、山の標高にとらわれすぎず、初期高所順応にたっぷり時間をかけ、7,000m以上の高度では無為な行動を控えることである。これはアルパイン・スタイルを実践している欧米クライマーの高所順化のやり方をもみても同様である。

チョー・オユー登山では全隊員12名と高所ポーター6名の18名が余裕をもって登頂することが出来た。プレ登山という位置づけから言ってこれは当たり前のことなのであろうが、それにしても、これほど緊張感の無かったヒマラヤ登山も珍しかった。極端な言い方をすれば、全員が登ってあたりまえ、と云う感じであった。

これほど気楽に8,000m峰が登れるようになったのもこの40年間に蓄積されたノウ・ハウのお陰であろう。

チョー・オユー行動表

氏名	期間	日数	休日	稼働率	7000行動日	7000以上泊	BC~BC日数	BC以上稼働率
八木原園明	9/27~10/14	18	7	61.1%	2	2	13	69.2%
宮崎 勉	9/27~10/14	18	7	61.1%	2	2	13	69.2%
庵形好雄	9/27~10/14	18	7	61.1%	2	2	9	88.9%
名塚秀二	9/22~10/14	23	10	56.5%	2	3	14	78.6%
吉田文江	9/27~10/14	18	7	61.1%	2	2	13	69.2%
田辺 治	10/1~10/14	14	6	57.1%	2	2	9	66.7%
江塚謙介	10/1~10/14	14	5	64.3%	2	2	9	77.8%
佐藤光由	9/21~10/14	24	11	54.2%	3	3	14	78.6%
後藤文明	9/22~10/14	23	10	56.5%	3	3	14	78.6%
星野龍史	9/21~10/14	24	11	54.2%	3	3	14	78.6%
寺田 勉	9/25~10/14	20	9	55.0%	2	2	13	69.2%
秋山 剛	9/22~10/14	23	10	56.5%	3	3	14	78.6%
N.シャツキヤ	9/20~10/14	25	11	56.0%	4	4	20	65.0%

(日本ヒマラヤ協会)